

第3期中期目標期間
(平成28～令和3年度)
自己点検・評価報告書

令和5年6月
リベラルアーツ研究教育院

目 次

I	組織の目的	1
II	中期目標期間の実績に係る特記事項	2
III	各水準の分析	7
IV	次期中期目標期間に向けた課題等	28

I 組織の目的

教育目的：

卓越した専門知とリーダーシップを備えた理工系人材の育成を目指す本学は、今回の改革にあたり、①最先端の理工系の専門知識の探究と②幅広い教養と（外国語を含む）優れたコミュニケーション能力の涵養を教育目標の二本の柱として掲げた。そのなかでリベラルアーツ研究教育院は後者の部分を担いつつ、「学院」が提供する「理工系専門知識」という縦系に「教養」という横系を綯い合わせ、学士課程、修士課程及び博士課程の専門教育と教養教育をダイナミックに組み合わせて、将来社会を牽引する、創造性溢れた魅力ある人材を育成する。人文科学、社会科学、外国語、ウェルネス等の広範な分野に触れることで、多様性に満ちた現代社会の中での自分の立ち位置を明確化しながら、21世紀社会の時代的課題を把握し、その中で自らの役割を認識する「社会性」、自らを深く探究する「人間性」、行動し、挑戦、実現する「創造性」を培う。

研究目的：

人文科学・社会科学・芸術・語学を中心とする各専門領域の卓越したスペシャリストが集うリベラルアーツ研究教育院は各構成員が個々の分野の学問研究を推進するとともに、研究会その他の催しによる交流と意見・情報交換により、互いの研究に刺激・ヒントを与えあい、切磋琢磨しながら、学際的な共同研究をも活性化し、時に学内外の自然科学研究者とも連携しつつ、文理共創の芽を育む。また研究成果の教育への還元とともに、「学び合い・教え合い」を促進するためのファシリテーションスキルの開発、授業設計等、構成員が協力し合う協力の場合そのものも研究の重要な対象となる。

Ⅱ 中期目標期間の実績に係る特記事項

1. 優れた点

(1) 教育成果

教育成果① 教養コア学修科目を軸とした学生の主体的学びの確立と学生同士による教え合い・学び合いの推進

社会の問題や人生の問題を自分ごととして捉え、「自分たちで考え、議論する」主体的学びのために、学部一年生から博士課程まで継続的・体系的なコア学修科目のカリキュラムを設計・運営、学生各自がゴールに向かって自分の目的に即した科目を選択しながら、「学びのストーリー」を描けるよう動機付けした。

1年次1Qで履修する「東工大立志プロジェクト」では、少人数制での対話を通じて大学での学びの動機付けや目標設定を行い、3年次3Qまたは4Qで履修する「教養卒論」では、それまでの学びを振り返り、社会的な課題について自ら問いを立てて探究した成果を学術的な文章にまとめ、それを元に対話する活動を通して思考を深め、学ぶ意味を再確認する機会を提供、また修士課程1年目に履修する「リーダーシップ道場」を経て「リーダーシップアドバンス」「ピアレビュー実践」を履修する学生はそれぞれ「東工大立志プロジェクト」「教養卒論」のクラスにファシリテーターとして参加するなど、上級生が自分自身の経験を下級生に伝える「教え合い・学び合い」の体系的なシステムの確立によって、「学びのコミュニティ」を構築した。さらに博士課程の「博士教養先端科目」「学生プロデュース科目」でも異なる専門分野・国籍の学生が「防災」「貧困」「平等」といった現代世界の問題についてグループワークを行ない、その成果を学生自身の企画・運営によるシンポジウム＋ポスターセッションで発表することにより、社会への問題意識と科学者としての倫理を培い、自然科学の専門知識をよりよき未来社会創成に役立てる「志」ある人材を育成する。

こうした教育を積み重ねた結果、「東工大立志プロジェクト」講義における受講生の活発な質問、生協図書や図書館における人文社会系著作の売り上げ／貸出点数の急激な増加をはじめ、中期計画以前とは違う学びへの積極的な意欲を持つ学生の数が増え、キャンパス内に新たな風景が出現することになった。その教育成果は学内においては、「東工大立志プロジェクトの設計と運営」(2016年)「リベラルアーツ新カリキュラムにおけるコア学修プログラムの開発」(2017年、最優秀賞)「東工大生の個性を伸ばす「リーダーシップ道場」の教育内容と方法」(2018年)「大学院生と学士課程学生の学び合いを実現するカリキュラムデザインと実践」(2019年)という東工大教育賞の継続的受賞が証明するところである。さらに東工大のコア学修科目は大学の教養教育の新たなカタチとして、その成果が国内の諸大学をはじめとする教育界や社会全般にも大いに注目され、新入生の「東工大立志プロジェクト」をはじめ、多くのメディアに取材を受け、取り上げられるところとなった。

教育成果② 留学や主体的学習を促進するための活動・環境整備

ILAは英語・第二外国語・文系教養・教職・ウェルネス・日本語という6つのセクションに分かれ、全員がコア学修科目の運営に一致協力してあたるかわら、それぞれのセクションの専門分野において必修・選択の授業を行なっている。また授業外の取り組みにおいても、英語・第二外国語セクションは学内他組織と連携しつつ、海外派遣留学の選考や留学事前準備、グローバル理工人育成、モナシユカレ

ッジ海外英語研修、カリフォルニア大学デービス校英語研修プログラム、TASTE 海外短期語学学修などの語学力向上や国際意識の醸成を目指したプログラムに貢献している。日本語セクションは留学生の受け入れに関する全学の中核的存在として大きな役割を果たしており、「日本語・日本文化科目群運営のための統合的機能を有する教務システム（JCOS）の開発」（東工大教育賞、2018 年、最優秀賞）「科目外活動を活かした学士課程入学前の東工大日本語予備教育の開発と運営」（東工大教育賞、2020 年）などの成果を上げている。

一方、ILA は学生の主体的学びを促進するための支援プログラムや環境づくりについても継続的に努力している。特筆すべきものとしては以下が挙げられる。

① ILA 図書室の創設と運営

大岡山西 9 号館 1 階に図書室を開設、人文科学・社会科学関係の書籍を多く取り揃え、週 4 回の開室で学生が閲覧・貸出できるよう便宜を図った。

② ライティング・センターの設立と運営

学術的文章作成技術を身につけ、またそれを他者に指南する技術に秀でた学部生・大学院生（文章チューター）が、大学で課される文章課題に悩む学生の相談に応じることで学修を支援する。2020 年度より遠隔にて業務を開始し、2022 年度 3 Q 4 Q より、Taki Plaza の学修相談ブース（B1）にて東工大生の文章相談に日々応じている。なお本プロジェクトは 2021 年度東工大教育賞を受賞している（「学生同士の学び合いに基づき学術的文章の執筆を支援する機関の創設と運営」2021 年）。

（２）研究成果 幅広い専門分野のスペシャリストが結集、ダイバーシティに富んだ環境のなかで、最先端の研究を推進

ILA は理工系大学における特色ある人文・社会科学系研究者の集まりであり、哲学、歴史、政治、法律、経済、宗教、文学、芸術、言語、教育、統計、科学史・科学倫理、心理、身体に至るまで多種多様な専門領域をカバーしながら、本学の理工系研究・教育を補完する文系研究の拠点をなしている。所属教員はそれぞれの専門領域における卓越した研究者として諸学会において重要な役割を果たし、最先端の研究を推進するとともに、東工大においては社会を見据えた専門家集団として、D & I 推進をはじめとする多面的な問題について、学内外に柔軟で建設的な提言・発言を積極的行なっている。

また ILA 教員の多くは環境社会理工学院内にもうけられた社会・人間科学系社会人間科学コースに所属。同コース内で学際的・専門的内容を中心とした授業カリキュラムを展開するとともに、それぞれの専門分野に基づき、修士学生、博士学生の指導にもあたっている。

さらには研究会をはじめとする部局内の切磋琢磨と意見・情報の交換や学内の自然科学研究者たちとの交流を通して、おのおのが旧来の専門を超えた学際的・文理協創的な学問研究の芽を育てているのも ILA のユニークな特色として挙げられよう。

その成果指標は自然科学系とは違う部分も含まれ、また ILA 内でも分野によって重点が異なる要素も多く、研究論文・研究発表・外部資金獲得のほかには著作や翻訳、小説、エッセイ、書評を含む著述活動全般、さらにはメディアにおける発言等も評価の対象となる。「（２）「研究の水準」の分析」では即物的に論文数・発表数・表彰・外部資金等を書き出しておくが、一方で、単なる数値によっては計量できない個々の論文・著作等の内容・質こそが問われることは付記しておきたい。

2. 特色ある点

(1) 理系大学における文系分野の教員集団

ILA は理系大学のなかの文系の研究者・教育者の集団であり、総合大学等の文系学部の専門教員とは違う自らのユニークな立ち位置を十分に自覚しながら、全学的なプロジェクトや意見交換の場に積極的に参加協力を行ない、他組織とも連携しながら、特色ある活動を展開してきた。

①「未来社会 DESIGN 機構」への参加

社会や科学・技術に対する客観的な分析・洞察に基づき、学術的な叡智に立脚した未来社会像をデザインする「未来社会 DESIGN 機構」に6～7人のILA教員が参加、積極的な提言を行ないながら、ワークショップの企画運営、「未来年表」の作成、学内の47名の教員とコラボしたシリーズ Stay home, stay geek をはじめとしてコロナ禍における配信用動画の制作等に大きな役割を果たしてきた。

②リーダーシップ教育院への出向

卓越した専門能力とともに将来の国際社会を牽引できるリーダー的人材を育成する修士課程から博士後期課程までの一貫教育プログラムに2018年の設立時から毎年3人の教員が2年任期で出向（常に計6人）、委員会の運営、プログラムの構築と準備、授業運営に積極的に関わっている。

③未来の人類研究センターへの出向

同センターは元々、ILA内の共同研究を促進するという目的で2019年度ILAの将来構想として学内に提案されたものである。執行部・学内の賛意を得て、2020年2月に科学技術創成研究院内に人文社会系の研究拠点として設立されることとなったが、その主要構成メンバーはセンター長に加え毎年2年任期で出向する計6人のILA教員である。発足後、同センターは「利他」をテーマにした「利他プロジェクト」を起ち上げ、学内の自然科学研究者とも連携しながら、月2回の研究会、さらに毎年度末には2日間にわたるカンファレンス「利他学会議」をwebinerにて開催、学内外の理工系の研究者および実践者をゲストに招いたこの催しは全国から多くの視聴者・参加者を集め、社会的に広く注目されることになった。また「利他」をテーマにしたメンバーの単著・共著も多く、加えて2021年度には査読付きオンラインジャーナル『コモンズ』を創刊（以降、年1回発行）、ILAを中心とする学内の人文社会研究促進の触媒となっている。

④卓越教育院への参加・協力

エネルギー・情報、超スマート社会、物質・情報の3つの教育院に、ILAから常時各2名の教員が参加して、授業、執筆指導、ビデオ教材作成時のインタビュアー役などその教育活動の一翼を担ってきた。とくに、超スマート社会およびエネルギー・情報の卓越教育院では、構想段階からILA教員が参画しており、採択にも一定の貢献をしている。さらに、ILA教員が、超スマート社会教育院内の委員会副委員長や全学の卓越教育院の今後を検討するWGメンバーを務めるなど、運営における重責も担っている。

(2) ダイバーシティに富む、風通しのよい組織を目指して

ILAは全学の中でもとりわけ女性教員の比率が高い部局であり、女性の新任教員を積極的に採用するのと並行して、授乳室の設置・会議時間の短縮・運営メンバーへの女性教員の起用等、女性教員が働きやすく、その意見が反映しやすい職場環境づくりにつとめてきた。その結果、第3期中期計画期間中の女性教員数は12から19人に増加した。

そもそもILAは外国人も含め、さまざまな専門領域・分野の教員が集まり、それぞれのセクションに

分かれての授業を軸としているという点でもダイバーシティに富んだ部局と言えるが、こうした組織を維持し、多様性をメリットとして活かしてゆくためには、構成メンバー同士の相互理解と交流が欠かせない。

そのための結束を促進する機会となるのは各WGを中心とするコア学修科目の授業運営およびFD活動である。先述したようにコア学修科目は全セクションの教員が乗り入れて担当するが、「立志P」「教養卒論」をはじめとするそれぞれの科目において、全体の企画・運営を担当するWGが形成され、WGの主導で各科目の開講前には担当教員向けの授業研修、開講期間中は各クラスでおきた問題等を共有し、感想や情報を交換する振り返りの会が定期的に行われ、授業期間終了後も総括ミーティングを行ない、反省を次年度の授業改良に活かすようにしている。とりわけコロナ禍のはじまった2020年度からの2年間はこうした密な情報交換と研修のシステムなくして、新たな遠隔方式による授業をつつがなく運営することはできなかったであろう。

このほかのFD活動としては、構成員の90%が参加する年2回のILA定期研修があげられる。うち一回は2Q終了後に行なう「鬼笑会」で、コア学修科目や、出向先であるリーダーシップ教育院および未来の人類研究センターの活動報告などを行ない、コア科目の運営や他の構成員が行なっている活動への相互理解を深めたうえで、全員を対象に各コア科目の授業への参加割り振りやWGや出向先に関する来年度への希望を収集・集計する。一方、3月の研修ではコア学修科目等の成果検証結果の共有に加え、「ハラスメント」「D&I (LGBT)」「文理共創」等のテーマを立て、講演＋グループワークを通して、全学で取り組もうとしている案件や部局の将来構想への理解を深めてきた。

（３）活発な企画広報活動と外部への発信

ILAは上記のような教育活動、研究活動に加えて、多くの催しごとを企画し、全体をwebサイト等を通じて活発に学内外に発信することで、社会に貢献し、自らの存在をアピールしながら、東工大の認知度上昇にも一役買っている。

① 各種講演会・シンポジウム・参加型ゼミナールの企画運営

ILAでは学内の教職員や学外の一般聴講者を対象に、さまざまな形式の企画を催してきた。第3期中期計画期間中は一般向けの講演会（（全5回の講演シリーズ「リベラルアーツ教養講座：《ニーベルングの指環》のコスモロジー」、大岡山東急病院との共催による「大岡山健康講座」全5回、おた区民大学「リベラルアーツで考える宗教の諸相」全6回等）を計24回、対談やシンポジウム（「リベラルアーツ研究教育院創設シンポジウム」、800人以上の来場者があり、本会場のほか急遽3つの会場をオンライン中継でつないだ「現代の社会と宗教 1995～2017」等）を計12回、学生と学外者が共同して演劇作品を制作する参加型ワークショップ（「大岡山物語」「声に出して読むシェイクスピア」等）を計28回開催した。さらに学生向けの企画「池上彰にいい質問をする回」も毎年開催し、シリーズ化している。

② ホームカミングデー・オープンキャンパスでの企画

毎年のホームカミングデーでは、2人～6人のILA教員が講師として自分の専門分野について講演。東工大の卒業生にリベラルアーツ諸分野の研究・教育の一端を分かりやすく紹介している。一方、オープンキャンパスでは「リベラルアーツ研究教育院説明会」でILAの教育理念とコア学修科目の内容を解説し、「リベラルアーツ万華鏡」と題した展示企画で各セクションの授業と個々の教員の研究を紹介、「東工大立志プロジェクトを体験しよう！」では高校生の希望者を集めて、グループワークを中心とする模擬授業を展開している。

② 蔵前工業会東京支部との提携による蔵前立志セミナーの企画・開催

2016 年まで 31 回を重ねた蔵前工業会東京支部による「大岡山蔵前ゼミ」を発展的に解消、2017 年から ILA が協力するかたちで「蔵前立志セミナー」を企画運営、セミナーは社会で活躍する卒業生による講演とそれを受けてのグループディスカッションの 2 部で構成されるが、特にグループディスカッションでは ILA がコア学修科目の授業で開発したアクティブラーニングとファシリテーションの手法を取り入れ、卒業生と学生が自由に語り合う場とした。この形式により、「大岡山蔵前ゼミ」の時と較べて、学生の参加が飛躍的に増加、以降、年 4 回のペースで第 3 期中期計画期間中、19 回を数えるに至った。（「蔵前工業会と協同で企画・運営する蔵前立志セミナーの実施実績」に対して、2019 年度東工大教育賞を受賞）

③Web サイト等広報媒体の充実

①に記したような企画・催しについては逐一、ILA のホームページに事後の報告を掲載し、会の内容の様子を外部に発信し続けている。また同ホームページは ILA 教員の受賞・表彰や活動を記録・発信する媒体となっている。そのほか ILA 教員が自分の研究教育について熱く語る「教員インタビュー・ページ」、コロナ禍以降、対面による講演会等の代替として、各教員が動画で自分の研究を紹介するオンデマンド・コンテンツの制作・配信など、シリーズものの企画も見逃せない。

Ⅲ 各水準の分析

1. 教育の水準の分析

(1) 教育活動の状況

<1 教育課程方針>

リベラルアーツ研究教育院（ILA: Institute for Liberal Arts）は6つの異なるセクションがそれぞれ文系教養、英語、第二外国語、ウェルネス、教職、日本語・日本語文化といった（選択）必修科目・自由選択科目の授業を担当・運営しながら、自然科学の基礎・専門知識の修得という本学6学院の理系教育を補いつつ、全学の学生を対象に、専門的な知を実社会で活かしていくために必要となる幅広い教養とコミュニケーション能力の涵養を体系的に行なっている。

学士課程1年次から博士課程にいたるまでの教養教育をつらぬく核となるのは、6セクションの全教員が担当・協力・連携しつつ、おおむね隔年で配置された必修のコア学修科目であり、これらはグループワークやディスカッションを通して学生の主体的な学びを促すアクティブラーニングの形式を取り入れ、学生同士が学び合い、教え合うシステムを構築しながら、社会に対する問題意識と科学者としての倫理を備えた志ある人材を育成している。

<2 教育課程の編成、授業科目の内容>

コア学修科目は文系教養科目群の中に位置づけられつつも、授業の設計・運営・担当に全6セクションの教員が参加・協力して行う、リベラルアーツ教育全体の核となる科目であり、以下の授業が隔年で配置された体系的な構成により、志ある人材の育成に寄与している。

東工大立志プロジェクト（学士課程1年）

本学リベラルアーツ教育のスタート地点に位置づけられる。講堂での大人数講義（2020年度以降はオンデマンド動画を配信）と少人数クラスでの演習を有機的に組み合わせながら、世界が抱える問題を知り、仲間との協働の中で自分も活かし仲間も活かすような場作りを学び、大学での今後の学びに向けて動機づけを行う。

教養卒論（学士課程3年）

学士課程での教養教育の出口となる3年次の必修科目。これまでに学んできた教養が、今後学んでいく専門科目や自身の将来ビジョンにとってどう生きてくるのか、社会にどう活かせるのかについて、自身で設定したテーマに沿って5,000～10,000字の論文にまとめる。小グループ単位で相互にレビューし、また大学院生の指導も受けつつ執筆を進める。書いた文章を仲間に批判してもらいながら仕上げることを通じて、各人が書き手として自立することを目指し、また自分の考えを文章にまとめる楽しさ・苦しさを体験する。

修士課程のコア学修科目

「リーダーシップ道場」ではグループワークを通し、多種多様なリーダーの在り方を検討・学習することで、共同作業等においてリーダーシップ力を涵養。「リーダーシップ道場」を修了し、一定水準以上

の成績を修めた学生は、実践のなかでリーダーシップを磨くための「ピアレビュー実践」や「リーダーシップアドバンス」を履修することが可能。「ピアレビュー実践」では、学士課程 300 番台の必修科目「教養卒論」に出講し、数名の学生を担当して執筆をサポート、また「リーダーシップアドバンス」では、学士課程 100 番台の必修科目「東工大立志プロジェクト」の少人数クラスに出講し、グループワークをファシリテート、学び合い・教え合いを実践し、身につけた能力を活かして学士課程教育に貢献しながら、リーダーシップを磨く機会を得る。

博士課程のコア学修科目

すべて英語開講・土曜開講で、「教養先端科目」(1 単位)、「学生プロデュース科目」(1 単位) から(組み合わせは任意の)合計 2 単位が必修。「教養先端科目」では、特定の社会課題をテーマに専門の異なる学生がグループワークを行い、成果をポスターセッションで発表。「学生プロデュース科目」では、ポスターセッションや専門家による講演を企画・運営することで、「教養先端科目」をサポートしつつ、学会運営のノウハウを修得する。2020 年度には、授業内容の改善に向けた検討を行い、2021 年度から社会的な課題の理解と学生同士の交流促進の両面での強化を行った。合わせて、コロナ禍により遠隔授業の実施が可能となったことから、授業実施形式についても見直しを行い、2022 年度からは「越境型教養科目」(2 単位)として内容の大幅なリニューアルを行うこととなった。

コア学修科目のほか、各セクションで独自のカリキュラムを以下のように展開している。

文系教養科目(選択必修科目)

主要な学問領域をカバーするバラエティある科目を用意、それらを「人文学系」「社会科学系」「融合系」の 3 つのカテゴリーに分け、学生が 1 年次にはそれらをくまなく履修し、2 年次以降は自分の興味・関心に合わせて履修できるようカリキュラムが設計されている。

- ・ 人文学系...哲学や文学など、人間や文化について探求する科目。ナンバリングは LAH.H～
- ・ 社会科学系...法学や政治学など、社会のしくみに関わる科目。ナンバリングは LAH.S～
- ・ 融合系...科学史や統計学など、文理融合的な科目。ナンバリングは LAH.T～

ひとつの学問領域について、「〇〇学 A」(100 番台)→「〇〇学 B」(200 番台)→「〇〇学 C」(300 番台)と連なっているものと、「教養特論〇〇」のように単発で開講されるものに分類。A→B→C と開講される科目であっても、積み上げ式にすべて履修しなければならないわけではなく、例えば B だけ、あるいは C だけ履修しても問題ないように、内容が工夫されている。さらに一つの学問をより深く学びたい人のために、少人数ゼミが用意されている。

また大学院修士課程では、コア学修科目「リーダーシップ道場」「ピアレビュー実践」「リーダーシップアドバンス」のほかに、文学、法律、経済などさまざまな文系の学問の本質かつ実践的な部分をコンパクトに学べる「文系エッセンス」科目を 1 単位の選択必修科目として開講している。

さらにもうひとつ、同じく修士課程 1 単位の選択必修科目として開講されているのが、アクティブラーニングを取り入れた授業としてコア学修科目に準ずるものと位置付けられる「横断科目」である。これは ILA の教員と各学院の理工系の教員や学外の専門家が協働して「横断」的に授業を組み立てる文理

連携型の科目であり、受講者は「長寿社会と生命」「社会の中の科学技術」等の普遍的テーマについて学ぶことで、理工系の専門分野の知見を掘り下げつつ、その社会的な位置づけや歴史的意義などを学ぶことができる（「修士課程の教養教育カリキュラムを ILA と学院の教員とが協働して開発・実践している」業績により、2020 年度東工大教育賞を受賞）。

英語科目

外国語としての英語の運用能力を高めることによって、将来的に英語で学修・研究活動を行う上で必要な英語の諸技能を修得し、併せて英語によるコミュニケーションに積極的に参加する姿勢を育む。また海外留学や国際的な研究活動の場において円滑なコミュニケーションを可能にするために、外国文化一般についての知識と理解を深める。

学士課程の必修科目として英語第一から第九があり、英語第一・英語第二で総合的な英語力向上の基盤構築をしたあと、英語第三～英語第八で、読解・作文に重点をおく RW と聴解・口頭表現に重点をおく LS の二種類の種目を履修。英語第九では TOEFL、TOEIC 等の公開テストにおいて、定められた合格基準点以上のスコアを取得することで単位が認定される。また選択科目として英語スピーキング演習をはじめとする各科目が開講されている。

また大学院課程では、A：英語の実践的な運用能力を向上させる学修、B：学術的な目的のための英語の運用能力を向上させる学修、C：英語圏の言語文化についての知識と理解を深める学修といった目的に応じて、多種多様な自由選択科目を開講している。

第2外国語科目

日本語とも英語とも異なる新たな言葉の網の目を通して、あらためて世界の見方と分節化の多様性を認識し、複眼的な思考法を育む。200 番台から履修できるドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語・中国語と、300 番台から履修できるイタリア語・韓国語の計 7 言語の「初級」科目が用意されている。学士課程では、そのうち 1 言語ないしは 2 言語を選択して学修し、計 4 単位が選択必修になっている。またドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語・中国語のそれぞれについて、「中級」「上級」「文化演習」「会話セミナー（入門・基礎）」「会話セミナー（応用・留学）」が開講されており、学生各人のニーズに応じて各言語のスキル・知識が身に付けられるようカリキュラムが工夫されている。さらには、古典ギリシャ語とラテン語が自由選択科目として用意されている。

ウェルネス科目

100 番台から 300 番台までの選択科目（講義・演習・実習）で構成されており、2 年次以降は学年に関係なくすべての科目の履修が可能となっている。講義・演習科目では、生涯にわたり健康的な生活を送るためのリテラシーを、生理・心理学、バイオメカニクスを通して学修。実習科目ではスポーツ活動を通してウェルネスを維持する適切な手法を修得し、またコミュニケーション能力・リーダーシップを実践的に身に付ける。（以下から最大 6 単位の履修が可能）

100 番台：①健康科学概論 ②健康科学演習 ③ウェルネス実習 ④生涯ウェルネス実習

200 番台：⑤生涯スポーツ実習

300 番台：⑥トータルウェルネス実習

日本語・日本文化科目

外国人留学生のために、日本語および日本文化を学ぶための科目（日本語文化演習）がレベル別・体系的に開講されている。学士課程では、大学での学びに役立つ論理的に書く技能や意見を述べる方法を修得するとともに、日本文化への理解を深める。大学院課程では、日本語を初めて学ぶ留学生向けのクラスから上級レベルのクラスまで、多様なニーズに応じたクラスがある。

教職科目

中学校教諭（「数学」「理科」）および高等学校教諭（「数学」「理科」「情報」「工業」）となるための専修免許状と一種免許状の取得を希望する学生を対象に、「教職概論」「教育工学」「情報機器とデジタル教材の活用」「教職実践演習」「教育実習」「学校インターンシップ専修」など、講義形式と演習・実習を組み合わせた体系的な教育をほどこし、卒業後に自立した教員となるための知識と意識を醸成する。

体系の分かる資料 リベラルアーツ研究教育院の「コア学修」紹介ページ

https://educ.titech.ac.jp/ila/education/core_liberal_arts_education.html

< 3 授業形態、学習指導法 >

カリキュラムを体系的に構築するために 2016 年度からすべての科目をナンバリングし、シラバスを用意している。シラバスには授業名、担当教員名、授業の目的・到達目標、授業形態、各回の授業内容、成績評価方法、成績評価基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等を記載。また教育上主要と認める授業科目は、原則として専任の教授・准教授が担当している。

別冊資料（教育）

1-7 授業日程

1-8 キャリア支援部門令和 2 年度活動報告

【第 3 期中期目標期間に係る特記事項】

教養教育コア学修プログラムでは、学士課程から博士後期課程まで、ペアワーク、グループワークを主体としたカリキュラムを推進した。3 年次で文章作成法とレビュー法を、修士課程でリーダーシップ発揮手法を実践的に教授した。コア学修プログラムでは、大学院生がファシリテーターを務めるなど、学び合いの環境を提供した。教養卒論の優秀論文執筆には発表会の機会を与え、博士後期課程では発表やシンポジウム実施を課するなど、学修成果の可視化を推進した。学生主体の多様な学びを支えるため、FD 研修を受講した教員が、複数名担当を含めた授業を展開し、クォーター毎に振り返りの FD に参加した。アクティブラーニングに適した教室整備を行った。

2019 年度から、コア学修科目のカリキュラムマネジメント（企画・運営・評価・改善等）を担当する教員を中心としてワーキンググループを設置し、コア学修プログラムの成果検証を行う取り組みを開始した。アンケート調査、インタビュー調査、学修の成果物の分析を実施し、FD 会で共有するとともに、翌年度の共通教材の改善へとつなげている。

< 4 履修指導、支援 >

・大学院課程（専門職学位課程を除く）においては、学位論文（特定の課題についての研究の成果を含

む)の作成等に係る指導(以下「研究指導」という)に関し、指導教員を明確に定めるなどの指導体制を整備し、計画を策定した上で指導することとしていること

- ・学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われていること
- ・社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う取組を実施していること
- ・障害のある学生、留学生、その他履修上特別な支援を要する学生に対する学習支援を行う体制を整えていること

別冊資料(教育)

1-8 キャリア支援部門令和2年度活動報告

1-9 東京工業大学アカデミック・アドバイザー制度に関する規則

1-10 学修コンシェルジュ 窓口のご案内

1-11 学士課程(新入生向け)学修コンシェルジュによるガイダンス配布資料

1-12 大学院課程(新入生向け)学修コンシェルジュによるガイダンス配布資料(英)

1-13 大学院課程(新入生向け)学修コンシェルジュによるガイダンス配布資料(日)

1-14 新入生(学士課程)総合オリエンテーション資料

1-15 大学院新入生オリエンテーション資料

1-16 東京工業大学学士課程における成績不振学生の修学指導に関する申合せ

1-17 キャンパスガイドブック

1-18 バリアフリー支援室案内

1-19 HUB-International Communications Space

1-20 保健管理センターのしおり

1-21 留学生チューター _ 留学生向け情報 _ 在学生の方 _ 東京工業大学

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

対話を主としたコア学修プログラムにおいて、学生が対話に困難を有する場合は、保健管理センターや学修支援センターと連携し、クラス担当教員が工夫したクラス運営を行い、必要に応じてワーキンググループへの相談や教員間での助言・支援ができる体制を整えている。また、経験豊富なGSA学生(資格を有するTA)にサポートを依頼し、学生間で支援しあう取り組みも行っている。2019年度からは初年次及び3年次の必修科目において、複数回欠席した学生を早期に発見して対応する取り組みを開始した。

< 5 成績評価 >

- ・成績評価基準を学位授与方針及び教育課程方針に則して定められている学習成果の評価の方針と整合性をもって、組織として策定していること
- ・成績評価基準を学生に周知していること
- ・成績評価基準に則り各授業科目の成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることについて、組織的に確認していること
- ・成績に対する異議申立て制度を組織的に設けていること

別冊資料(教育)

1-22 東京工業大学における成績に対する確認及び不服申立てに関する要項

成績評価については、その基準をすべての科目のシラバスに明記している。成績評価と単位認定については、教養コア学修科目では同一科目でも多数のクラスに分かれる場合があるので、統一した成績評価基準を担当教員間で共有し、厳格に成績を評価している。評価に疑義のある場合には、各科目運営ワーキンググループが対応し、基準がずれないように対応している。その他の授業科目に関しては、各科目実施部会長（もしくは教務担当の専任教員）が成績評価と単位認定が厳格かつ客観的に行われていることを確認、同一科目で複数のクラスがある場合は、評価に大きな偏りが出ないよう一定の基準を設け、それが遵守されているかを各科目実施部会長（もしくは教務担当の専任教員）が確認している。

< 6 教育の国際性 >

・卒業（修了）時の学生からの意見聴取の結果により、大学等の目的及び学位授与方針に則した学習成果が得られていること

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

○グローバル人材育成推進支援室や国際連携課、留学生交流課等と協力し、モナシュカレッジ海外英語研修、カリフォルニア大学デービス校英語研修プログラム、TASTE 海外短期語学学修など語学力向上を目指したプログラムを実施した。

○ 博士後期課程の選択必修科目「教養先端科目」「学生プロデュース科目」では、多様な国籍や文化的背景を有する学生がチームを作り、世界が直面する課題の解決に向けて提案を行うプロジェクト活動を行い、シンポジウムの開催と発表を行った。学生が英語での対話を授業内外で積極的に行うことを促した。

< 7 地域連携による教育活動 >

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

大田区立清水窪小学校にプログラミングについての出前授業を行なった。また矢口西小学校で開催された教員対象のプログラミング研修会に参加し、コメントをした。大田区・目黒区の小学生を対象に本学でプログラミング教室を9月と3月に開催した。

大田区と提携して、おおた区民大学「リベラルアーツで考える宗教の諸相」全6回の連続講座を催した。また、高校生を対象とした大岡山のオープンキャンパスに参加し、カリキュラムを中心とした説明会、セクション別のポスター展示のほか、立志プロジェクトの模擬授業を行なった。

一般向けの講演会およびシンポジウムを計3回開催したほか、学生と学外者が共同して演劇作品を制作する参加型ワークショップも3回開催した。

< 8 教育の質の保証・向上 >

・就職先等からの意見聴取の結果により、大学等の目的及び学位授与方針に則した学習成果が得られていること

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

別冊資料（教育）

2-6_東工大の卒業生に関する企業アンケート

< 9 学際的教育の推進 >

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

修士課程1単位の選択必修科目として開講されている「横断科目」では「長寿社会と生命」「社会の中の科学技術」等の普遍的テーマを立てながら、ILAの教員と各学院の理工系の教員や学外の専門家が協働して「横断」的に授業を組み立てており、受講者は理工系の専門分野の知見を掘り下げつつ、その社会的な位置づけや歴史的意義などを学ぶことができる。

また、博士課程必修のコア学修科目「教養先端科目」では、さまざまな学院・研究室に所属する学生がグループを組み、それぞれの専門分野の知見を持ち寄って、SDGs等の社会的テーマについて意見交換し、解決案を図解したポスターを制作（2020年度以降はオンラインによるプレゼンテーション大会を実施）、さらに「学生プロデュース科目」の受講生がポスター・プレゼンテーションと専門家による講演・シンポジウムを組み合わせた最終授業を企画運営することで、全体が学際的な模擬学会の場となっている。

<10 リカレント教育の推進>

- ・リカレント教育の推進に寄与するプログラム

社会人アカデミー

<https://www.academy.titech.ac.jp/>

Ⅱ 教育成果の状況

< 1 卒業（修了）率、資格取得等 >

・標準修業年限内の卒業（修了）率及び「標準修業年限×1.5」年内卒業（修了）率、資格取得等の状況が、大学等の目的及び学位授与方針に則して適正な状況にあること

別冊資料（教育）

2-1 標準修業年限内の卒業（修了）率及び「標準修業年限×1.5」年内卒業（修了）率

< 2 卒業（修了）時の学生からの意見聴取 >

【基本的な記載事項】

・教育改善に関するアンケート

学士課程

https://www.eduplan.titech.ac.jp/wp-content/uploads/01_result_R03b.pdf

修士課程

https://www.eduplan.titech.ac.jp/wp-content/uploads/02_result_R03m.pdf

博士後期課程

https://www.eduplan.titech.ac.jp/wp-content/uploads/04_result_R03d.pdf

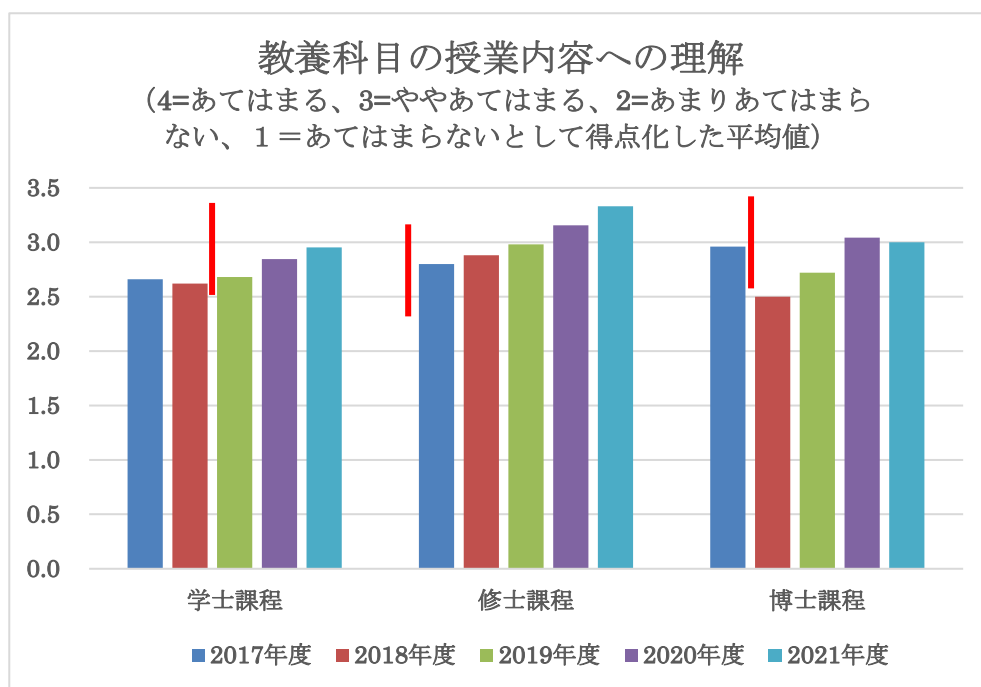
2-2 学士課程教育改善アンケート

2-3 修士課程教育改善アンケート

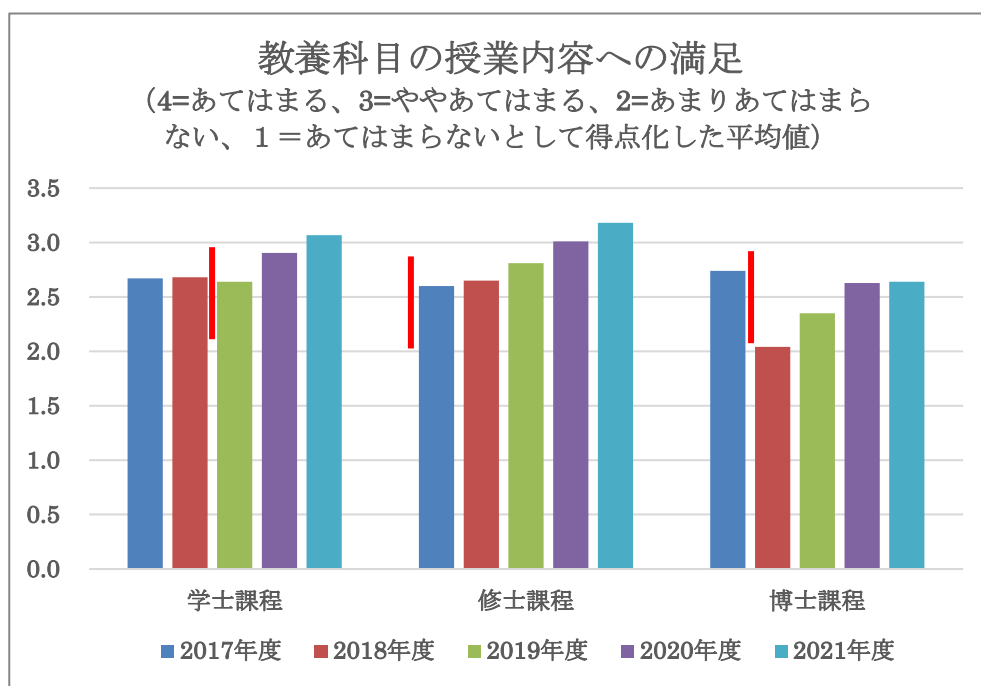
2-5 博士課程教育改善アンケート

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

2016年度の教育改革第1期生が学士課程を卒業する2019年度以降、教育効果および学修成果の検証のためアンケート調査、インタビュー調査を実施している。卒業時・修了時におけるアンケート調査では、改革実施後、教養教育に対する満足度は年々向上している。博士課程については、教養教育を必修化したことにより、当初、理解度・満足度ともに低下したが、その後に評価が改善してきている。修士課程については、学士課程や修士課程と比べて理解度・満足度ともに高くなっている。その要因として、修士課程の科目はすべて選択科目であること、また、就職を目前に控えた多くの学生にとって、所属する研究室以外の学生と交流できる機会があることを肯定的に捉えていること（インタビュー調査での声から）が考えられる。博士課程については、評価が改善してきているとはいえ、教養教育が必修とされていることへの不満の声も少なからず寄せられているところであり、科目の選択肢を増やすことなど、改善策について検討を進めているところである。

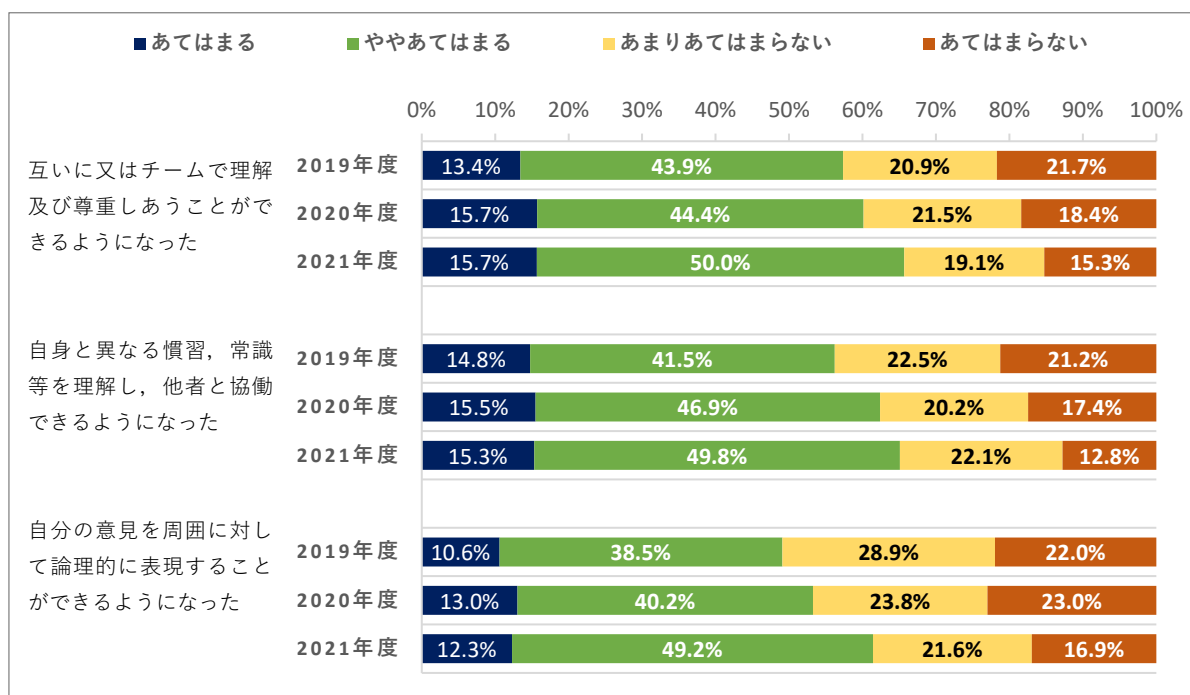


「授業科目（学士：教養科目/修士・博士：文系教養科目）の内容は十分に理解できた」に対する回答
※赤いラインは、学生の大多数が旧カリキュラムから新カリキュラムへと変わった時期（以下同様）

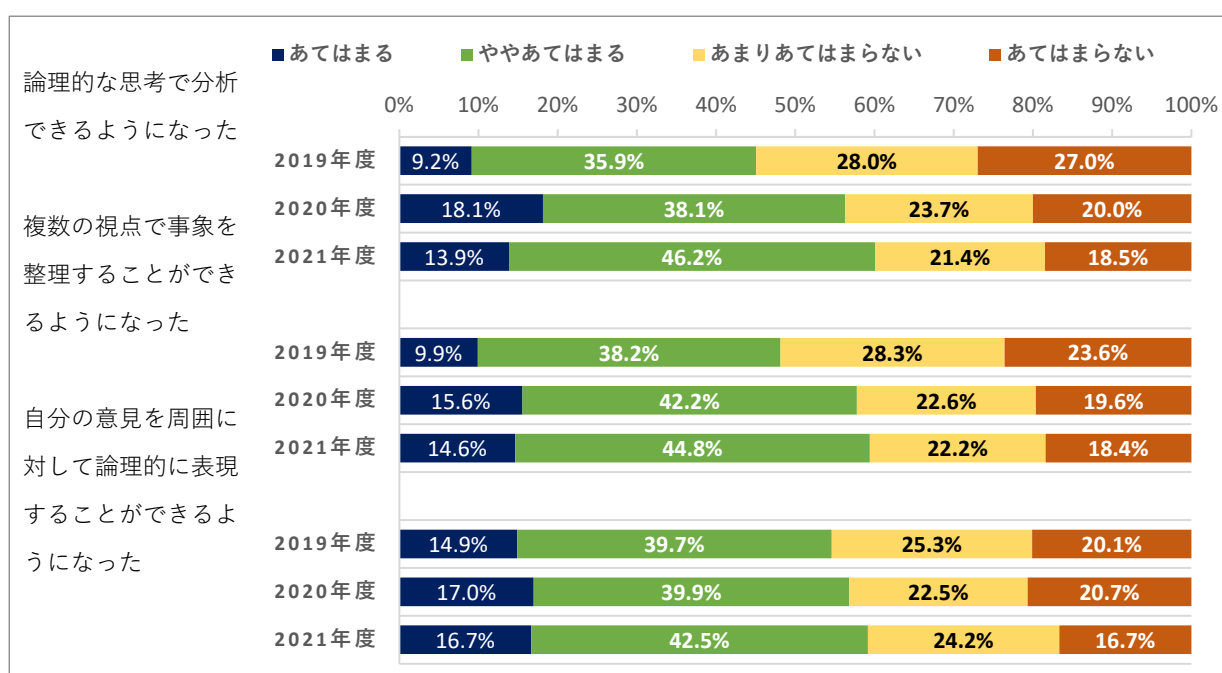


「自分の専門分野以外の授業科目（学士：教養科目/修士・博士：文系教養科目）に対して満足している」に対する回答

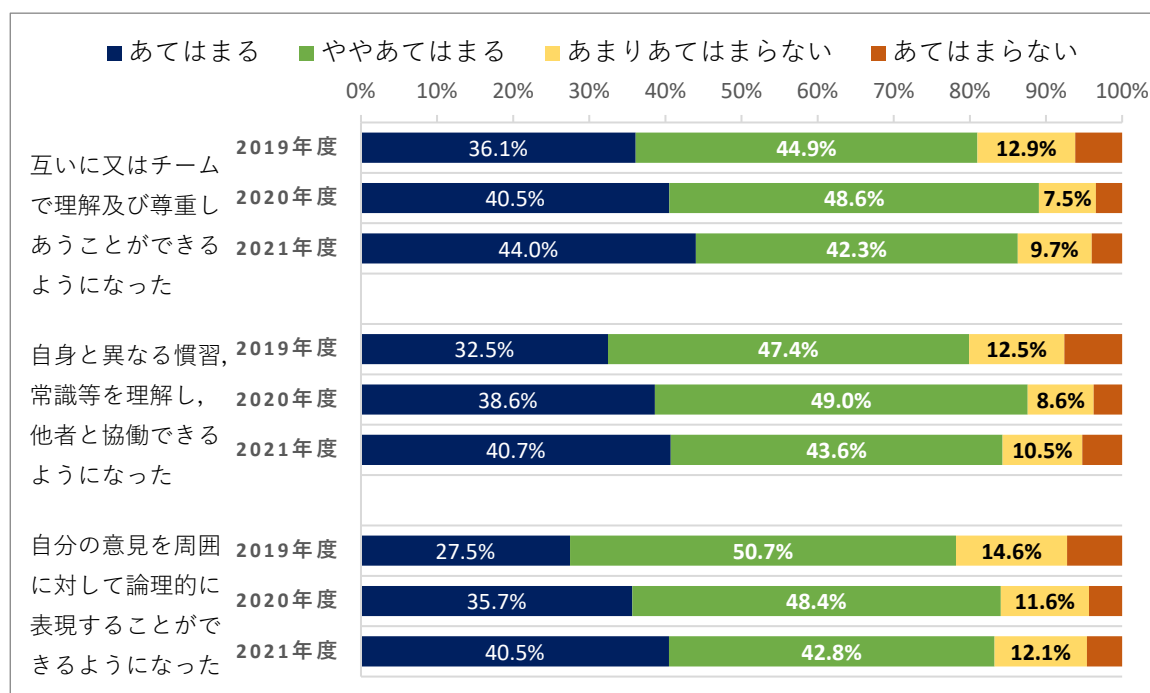
コア学修科目を履修することでディグリーポリシーに掲げられた諸能力の向上に役立ったと感じるかについて尋ねた設問では、それぞれの科目の育成目標と近い項目において、役立ったという実感がある学生の割合が年々上昇している。



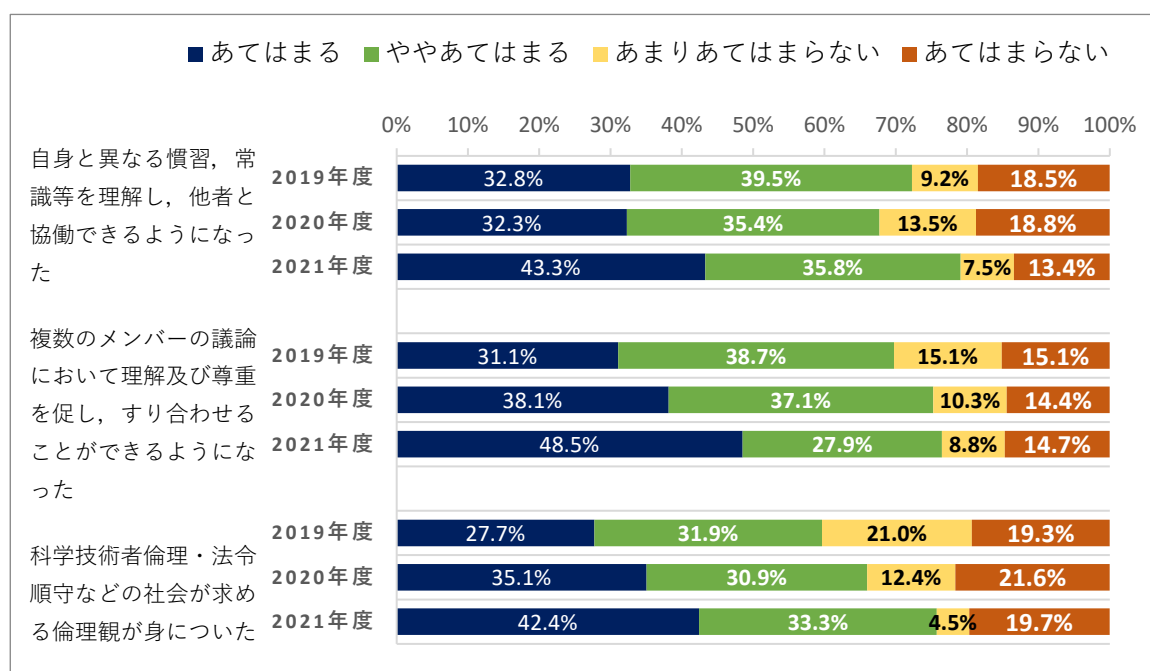
東工大立志プロジェクト 成長実感（上位3項目）経年変化



教養卒論 成長実感（上位3項目）経年変化



修士課程コア学修科目 成長実感（上位3項目）経年変化



博士課程教養科目 成長実感（上位3項目）経年変化

（２）「研究の水準」の分析

I 研究活動の状況

< 1 研究の実施体制及び支援・推進体制 >

- ・ 本務教員の年齢構成

教員年齢区分	本務教員数				
	教授	准教授	講師	助教	合計
～24 歳	0	0	0	0	0
25～34 歳	0	1	3	0	4
35～44 歳	0	7	0	1	8
45～54 歳	7	7	0	3	17
55～64 歳	13	6	0	3	22
65 歳～	0	0	0	0	0

指標11：本務教員あたり研究員数



< 2 研究活動に関する施策／研究活動の質の向上 >

- ・ 構成員への法令遵守や研究者倫理等に関する施策の状況が確認できる資料
：別冊資料（教育）1-1～1-30
- ・ 研究活動を検証する組織、検証の方法が確認できる資料
：別冊資料（教育）1-31

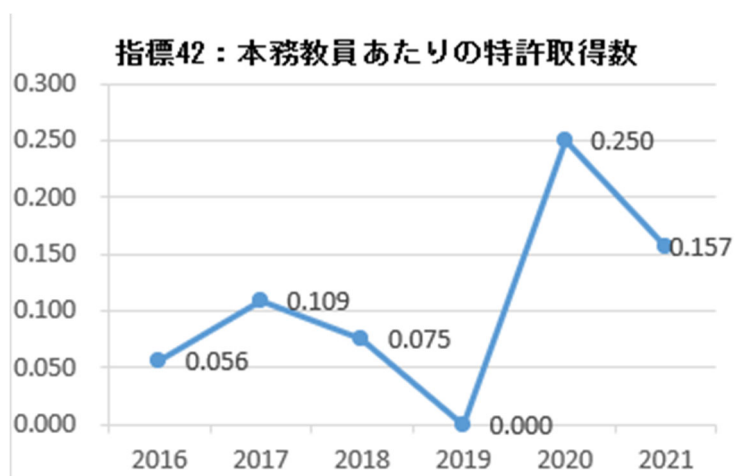
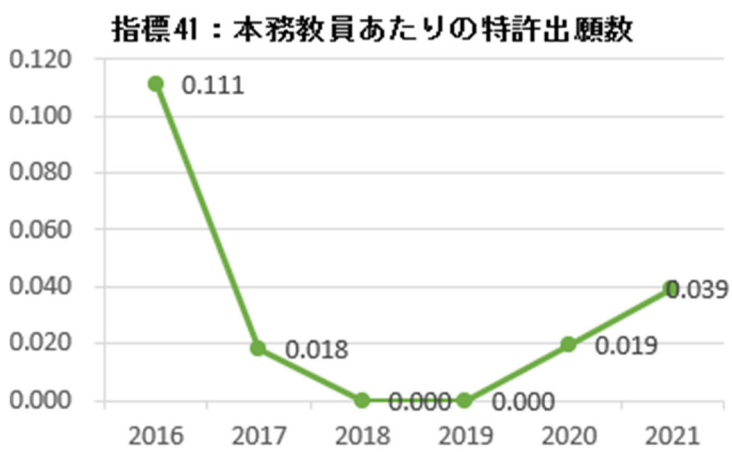
＜3 論文・著書・特許・学会発表など＞

- ・ 研究活動状況に関する資料

論文数等

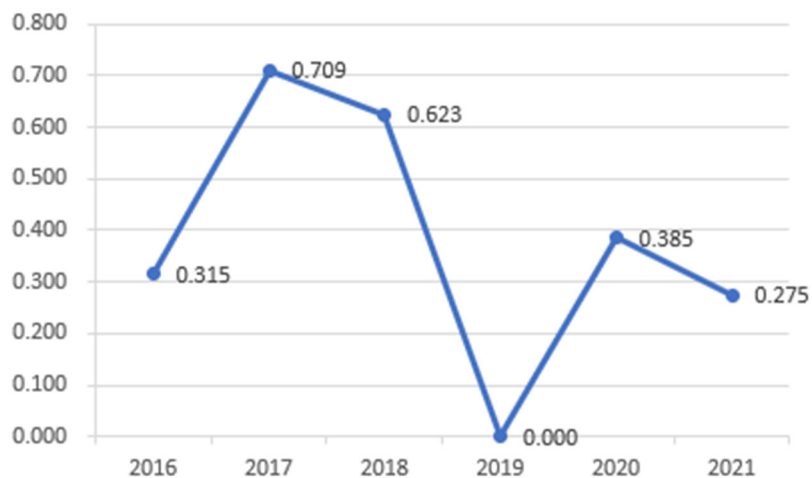
H28			H29			H30		
査読付き論文数	学術図書	作品等	査読付き論文数	学術図書	作品等	査読付き論文数	学術図書	作品等
5	29	56	8	94	49	6	94	65

R1			R2			R3		
査読付き論文数	学術図書	作品等	査読付き論文数	学術図書	作品等	査読付き論文数	学術図書	作品等
20	79	13	22	41	1	46	44	6

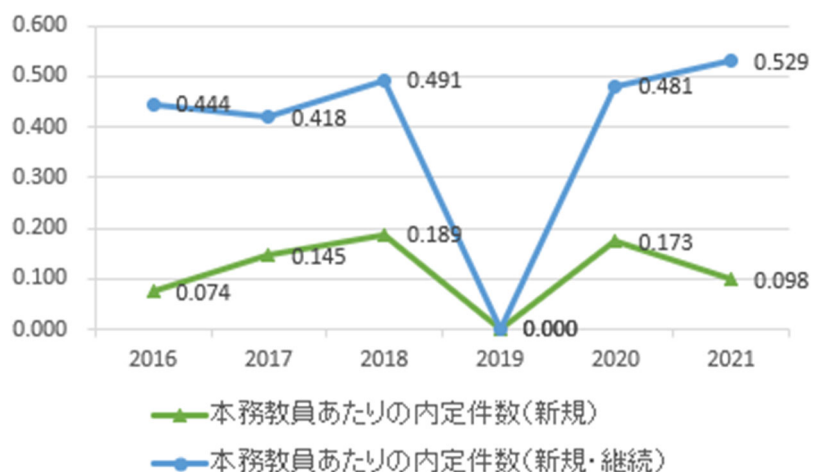


＜ 4 研究資金＞

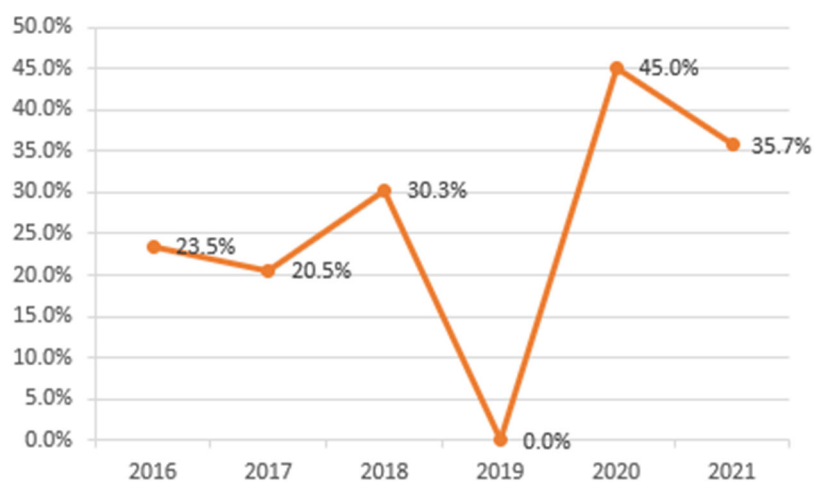
指標25：本務教員あたりの科研費申請件数（新規）

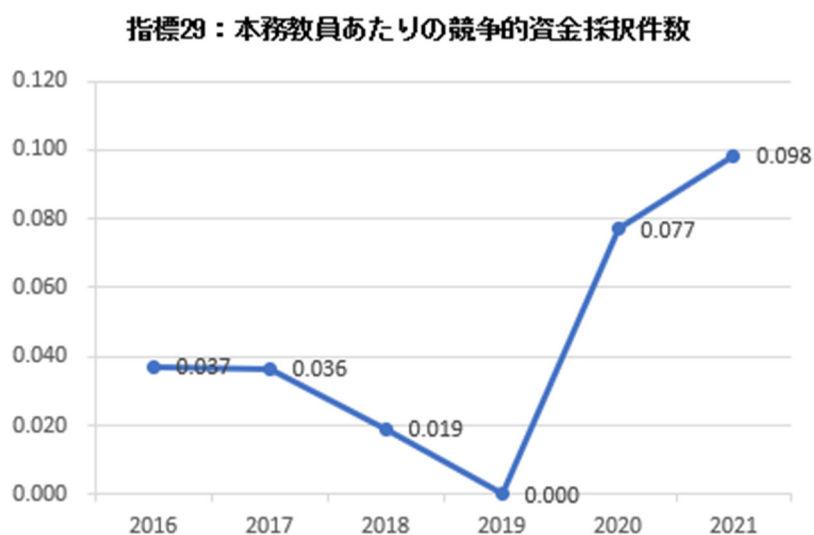
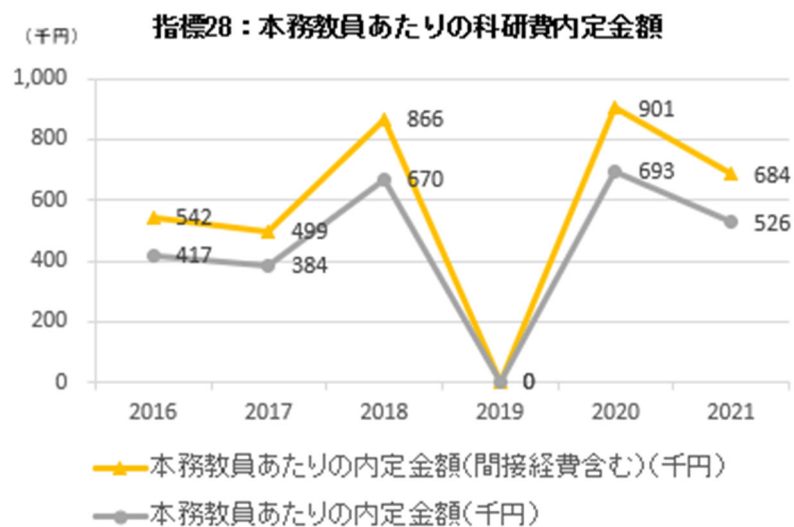


指標26：本務教員あたりの科研費採択内定件数

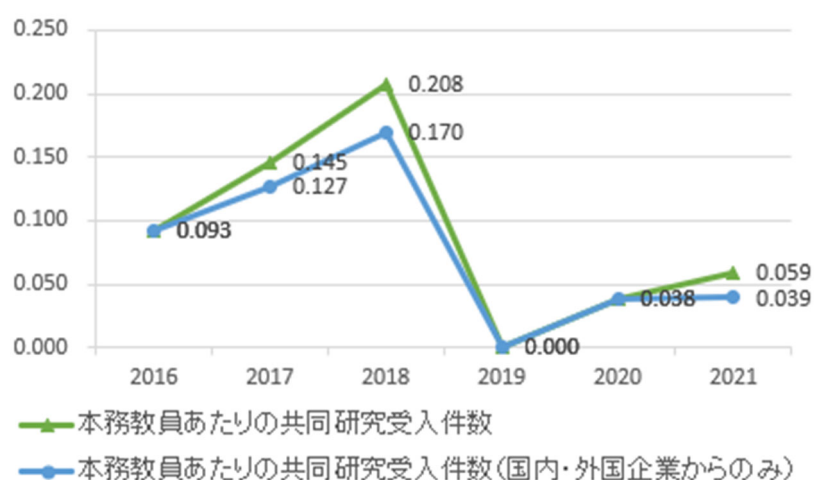


指標27：科研費採択内定率（新規）

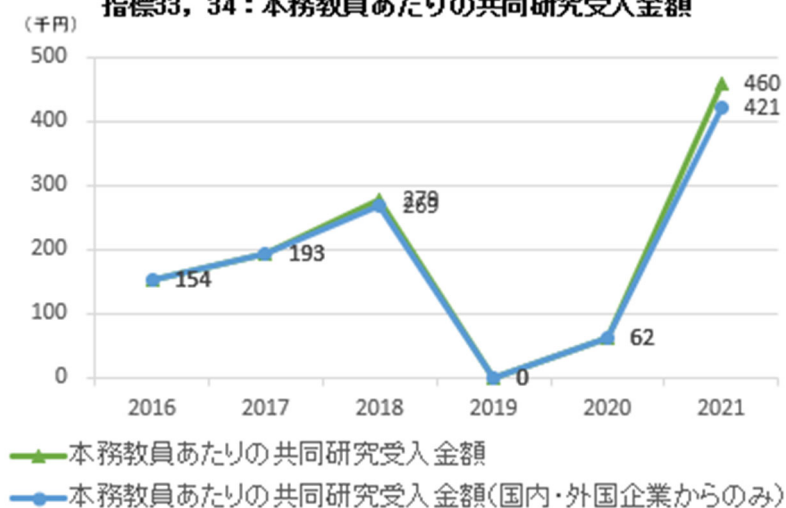




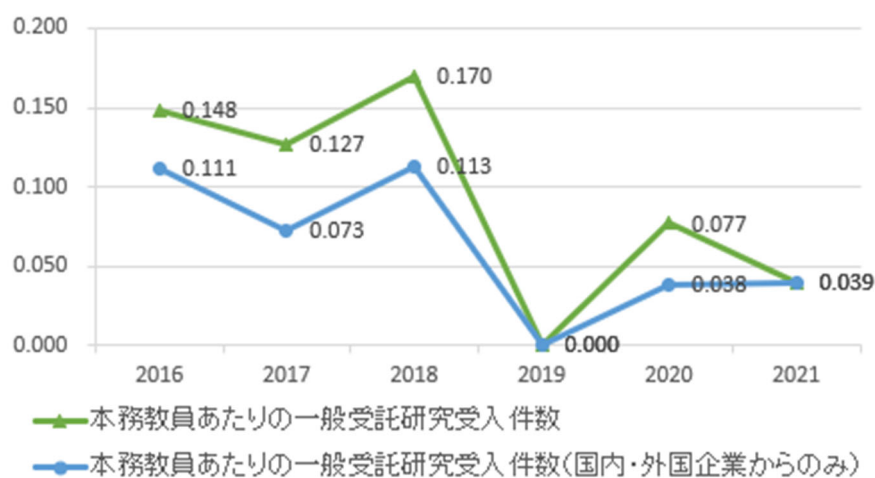
指標31, 32：本務教員あたりの共同研究受入件数

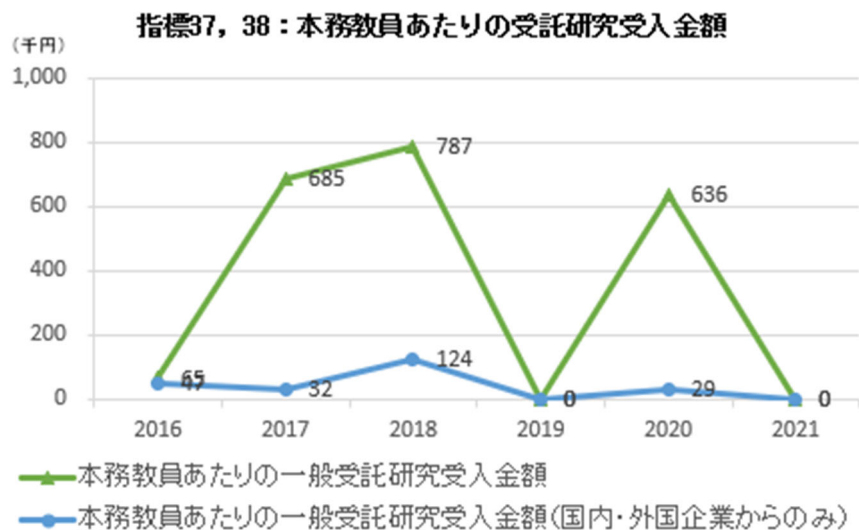


指標33, 34：本務教員あたりの共同研究受入金額



指標35, 36：本務教員あたりの受託研究受入件数

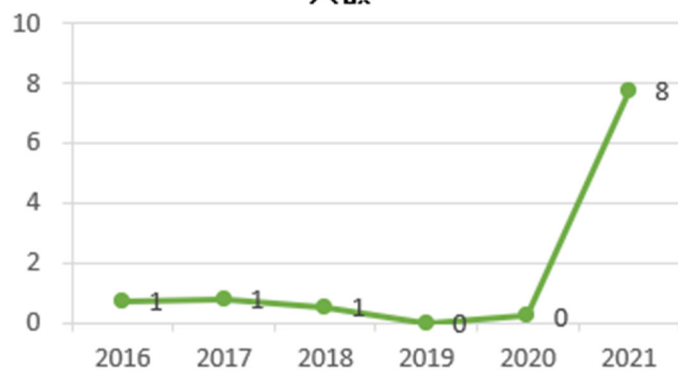




指標43：本務教員あたりのライセンス契約数



指標44：本務教員あたりのライセンス収入額
(千円)



指標45：本務教員あたりの外部研究資金の金額
(千円)



指標46：本務教員あたりの民間研究資金の金額
(千円)



＜5 地域連携による研究活動＞

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

2017 年秋に大田区と提携して、おおた区民大学「リベラルアーツで考える宗教の諸相」全6回の連続講座を催した。また2016年～2019年にかけて、ウエルネス・セクションでは大岡山東急病院との共催で大岡山健康講座を5回行ない、それと連動して運動・食事をテーマにした駅ポスターを制作した。

<https://www.titech.ac.jp/news/2017/038403>

<https://nonrepetitious56.rssing.com/chan-24830299/article909.html>

＜6 国際的な連携による研究活動＞

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

○交流のあったイタリア・トレント大学との全学協定締結に貢献した。

○2021年、Tokyo Tech ANNEX Berkeley の設立を機に、UC バークレー主催、ILA 共催のコロキウムをオンラインで開催、今後の研究や教育上の協働のきっかけづくりとした。

9月8日 講演者 ヒュー・デフェランティ

11月9日 講演者 安納真理子

https://events.berkeley.edu/index.php/calendar/sn/ieas/?event_ID=140927

Ⅱ 研究成果の状況

< 1 研究業績 >

(リベラルアーツ研究教育院の目的に沿った研究業績の選定の判断基準)

すでに p.3 (研究成果 幅広い専門分野のスペシャリストが結集、ダイバーシティに富んだ環境のなかで、最先端の研究を推進) に述べたように、ILA は専門領域を異にする多様な研究者が集まっており、評価の重点対象と基準もそれぞれの分野において異なっているため、一律の物差しで優劣を判断することは難しい。ここでは可視化しうる客観的な材料として、p.17< 3 論文・著書・特許・学会発表など > 「研究活動状況に関する資料」を補足するかたちで、中期計画期間中の学術分野における個々の研究者の受賞を書き出しておく。

【第3期中期目標期間に係る特記事項】

学外の賞

2016 年

栗山直子助教 科学技術分野の文部科学大臣表彰「科学技術賞(理解増進部門)」

西田亮介准教授 社会情報学会優秀文献賞

2017 年

林直亨教授 第 42 回日本健康開発財団研究助成優秀賞

山元啓史教授 「じんもんこん 2017」ベストポスター賞

2018 年

若松英輔教授 第 16 回角川財団学芸賞

北村匡平准教授 第 9 回表象文化論学会奨励賞

2019 年

鈴木悠太准教授 2019 年度日本学校教育学会賞

松田稔樹准教授 NPO 法人日本シミュレーション&ゲーミング学会・第 24 回論文賞

2020 年

松田稔樹教授 公益財団法人科学技術融合振興財団・第 13 回 FOST 社会貢献賞

伊藤亜紗准教授 第 13 回「(池田晶子記念) わたくし、つまり Nobody 賞」

磯崎憲一郎教授 第 56 回谷崎潤一郎賞

伊藤亜紗准教授 第 42 回サントリー学芸賞(社会・風俗部門)

2021 年

川名晋史准教授 日本防衛学会猪木正道賞特別賞

山元啓史教授 東京大学史料編纂所デジタル・ヒューマニティーズ・ポスター賞

松田稔樹教授 日本情報科教育学会・第 14 回全国大会優秀実践賞

学内の賞

東工大挑戦的研究賞

2017 年

西田亮介准教授 (「情報過剰の時代における政治の情報発信と受容に関する研究」にて)。

手島精一記念研究賞

著述賞

2016 年度

伊藤亜紗（リベラルアーツ研究教育院 准教授）

「目の見えない人は世界をどう見ているのか」（光文社）

2017 年度

山崎 太郎（リベラルアーツ研究教育院 教授）

「《ニーベルングの指環》教養講座－読む・聴く・観る！リング・ワールドへの扉」（アルテスパブリッシング）

2018 年度

池上 彰（リベラルアーツ研究教育院 特命教授）

岩崎 博史（科学技術創成研究院 細胞制御工学研究センター 教授）

田口 英樹（科学技術創成研究院 細胞制御工学研究センター 教授）

『池上彰が聞いてわかった生命のしくみ 東工大で生命科学を学ぶ』（朝日新聞出版社）

2019 年度

川名晋史（リベラルアーツ研究教育院 准教授）

『共振する国際政治学と地域研究』（勁草書房）

2020 年度

河村彩（東工大 リベラルアーツ研究教育院 助教）

「ロシア構成主義－生活と造形の組織学」（共和国）

北村匡平（東工大 リベラルアーツ研究教育院 准教授）

「美と破壊の女優 京マチ子」（筑摩書房）

西田亮介（東工大 リベラルアーツ研究教育院 准教授）

「メディアと自民党」（角川書店）

2021 年度

中野民夫（東工大 リベラルアーツ研究教育院 教授）

『学び合う場のつくり方-本当の学びへのファシリテーション』（岩波書店）

研究論文賞

2021 年度

木内久美子（東工大 リベラルアーツ研究教育院／科学技術創成研究院 准教授）

"Tweaking Misogyny or Misogyny Twisted: Beckett's Take on "Aristotle and Phyllis" in Happy Days"
Beckett and Politics (Palgrave and Macmillan, October 2020: pp.91-105.)

IV 次期中期目標期間に向けた課題等

【教育の水準の分析】に係る事項

(1) 意欲的な学生がリベラルアーツをさらに学べる教育機会の拡充

1 年次 1 Q の「東工大立志プロジェクト」において、全新入生は専門に限定されない多様な学問分野の存在と社会的問題との関わりについても視野を広げ、思考を深めることで、大学での自覚的な学びに向けて動機づけられる。その結果、従来に較べても、リベラルアーツ諸科目を主体的な関心をもって選択・履修する学生の割合は増加したものの、必修の単位数には限りがあり、専門と並んで人文・社会科学や特定の語学に関する知識をさらに深めたいと考える学生のニーズをカリキュラム上、十全に満たすには至っていない。この点を補うものとして、文系教養科目内にもうけられた少人数ゼミや、学生が主体になった「読書会」「研究会」等の自由企画があるが、第 4 期中期計画期間においては、「探究プログラム」を立ち上げる。これは通常の文系・外国語科目の必修卒業要件の 26 単位のほか、追加で（全学の卒業要件 124 単位の中に数えられる）6 単位のリベラルアーツ科目を履修するプログラムであり、学びの動機づけと研究計画の明確化を目的とした探究ワークショップ（1 年次／2 年次、1 単位）と ILA 教員が学生を個人指導する探究メンタリング（3 年次 1 単位）を軸にしながら、よりインテンシブにリベラルアーツを学ぶことで、高度な理工系の専門知識と文系の学問知を併せもつ人材の育成と輩出を目指すものであり、現在、2024 年度からの始動に向けて、検討と準備が進んでいる。

(2) 授業の効率化による教員の負担減

2016 年度のカリキュラム改年初年度にはリベラルアーツ・コア科目のうち、「東工大立志プロジェクト」と大学院修士課程の「リーダーシップ道場」、博士課程の「博士教養先端科目」「学生プロデュース科目」が新たにスタートしたが、これはアクティブラーニング型の授業を担当した経験のない教員が新たなグループワークの手法を学びつつ、しかも限られたマンパワーの中で複数の授業を担当しなければならないなど、フル稼働を強いられる状況における一種の「見切り発車」であった。その後、大学執行部の理解を得て、人員は年ごとに増強され、今に至っているが、その一方、新カリキュラムの年次進行により、3 年次の「教養卒論」、修士課程の「リーダーシップアドバンス」「ピアレビュー実践」が新たに加わるなど、授業の数も増大し、他機関への出向や部局内外の新たなプロジェクトや委員会も増えて、教育に関するロード過多の状況は改善していない。第 4 期中期計画においては、2016 年以來の授業成果の検証や改善と並行して、授業の効率化による教員の負担減が喫緊の課題となろう。すでに博士課程コア科目については 2022 年度から、「博士教養先端科目」と「学生プロデュース科目」各 1 単位を発展的に解消し、「博士越境型科目」2 単位を新設することで、学生の要望に応えると同時に、教員の負担減も一部実現しつつあるが、他の科目についても、効率化に向けてのさらなる工夫が求められるだろう。そのために、1. GSA や TA をはじめとする学生の授業への協力体制を強化し、「学び合い・教え合い」の精神をさらに推し進める、2. 一部の授業をオンデマンド化し、映像資料をクラス担当教員間で共有できるようにするなどの方向を検討しつつある。

【研究の水準の分析】に係る事項

○文理共創をはじめとする共同研究のさらなる活性化

細かく枝分かれした文系の学問領域のなかで各教員はみずからが専門とする個々の分野において成果を上げているが、ILA 全体としては複数の研究者の知見を結集した共同研究の創出という面でいまだ

形を成すにいたらない多くの可能性を宿しており、第4期中期計画期間中はこの点のさらなる活性化が課題となる。とりわけ、医科歯科大との統合を控えた本学においては、医歯学と理工学の協力による学際的な共同研究（コンヴァージェンス・サイエンス）の推進が叫ばれており、リベラルアーツは両者を結ぶ触媒としての役割が期待される。幸い、このような文理共創研究の萌芽はすでに以下の活動のうちに胚胎しており、はこれらの芽をいかに大きく育てて結実へと導けるかが今後の展開の鍵となるであろう。

- (1) ILA 教員が中心メンバーとなる科学技術創成研究院「未来の人類研究センター」では月2回の研究会や毎年3月に開催される「利他学会議」において、学内外の自然科学研究者を招いて、数多くの対話を重ねてきた。2023年からは「利他プロジェクト」に加えて、社会と自然の両方に関わるエレメントを対象にした「水プロジェクト」が発進、理系研究者との提携がますます促進されることになる。
- (2) ILA 教員の多くが授業と学生の研究指導を担当する大学院「社会・人間科学」コース（社会環境工学院）には学内外の理系学部から進学した学生が一定数おり、文系と理系の双方にまたがるような横断的研究を推進している。
- (3) 修士課程で開講されている「横断科目」（選択必修科目1単位）はILAの教員と各学院の理工系の教員や学外の専門家が協働して「横断」的に授業を組み立てる文理連携型の科目であり、受講者は「長寿社会と生命」「社会の中の科学技術」等の普遍的テーマについて学ぶことで、理工系の専門分野の知見を掘り下げつつ、その社会的な位置づけや歴史的意義などを学ぶことができる。今後は博士課程にも（博士越境型科目に対するもう一つの選択肢として）、「横断科目」を発展させた「文理共創科目」をもうけることを検討・準備中。「地域社会貢献」、「河川と都市環境」、「軍事技術史」、「科学と文学」等の普遍的テーマを立て、専門家の研究発表と受講生とのディスカッションを組み合わせた研究会形式の授業によって、コンヴァージェンス・サイエンスの新たな展開と可能性を模索する。